

教会書簡と現代のキリスト教

非キリスト教的社会の中へ浸透していこうとする宣教的課題と、多様なパウロ解釈が拮抗する中で、自分たちのパウロ理解の正しさを示そうとする教会内の課題の二つが教会書簡を支配している。そうだとすれば教会書簡は、連載の冒頭で述べたように(2016年3月号)、現代日本のキリスト教会を映し出す鏡だと言える。すなわち我々もまた、教会書簡の著者とよく似た状況に立っているのである。

「信仰」を「信心」という、ヘレニズム的用語で言い換えることも、「良い行い」や「節度・慎み」、「従順」といった倫理的概念を終始一貫して強調することも、自分たちの宗教をヘレニズム・ローマ世界の人々が理解しやすい、そして受け入れやすいものとして提示しようとする宣教的努力の表れである。それは、新興宗教としてのキリスト教が「よそ者」と見なされ、ともすると危険視さえされた当時の状況に鑑みれば十分理解できる努力だし、その状況は日本のキリスト教が経験してきたことでもある。

しかしその努力は、社会的規範や慣習に反しない宗教共同体として自分たちを提示することにつながる。家父長たる指導者を中心とする「家族的共同体」として教会は理解され(「神の家」としての教会。Iテモテ3:15)、その支配構造を脅かす「異なる教え」は、誤った信仰理解というレッテルを貼られ排除される。結婚を禁じ、禁欲的生き方を奨励するような教えは(Iテモテ4:1-11)、男性中心社会の「秩序」に反するものであり、キリスト教の評判を落とす原因となるゆえに、宣教的課題に逆行するものとされる。つまり、一般社会の中に受け入れられて教会が大きく発展していくことを強く志向すればするほどに、キリスト教は——意識的であるにせよないにせよ——既存秩序の維持・補完に資する組織という性格を強めていくのであり、それに反する(と思われる)要素を「誤謬」や「異端」として排除していくことになるわけである。教会書簡は、まさしくその段階にあった初期キリスト教を反映しているが、日本のキリスト教も同じ課題と危険に直面してきた(そして今もしている)のではないだろうか。

キリスト教はイエスの出来事を解釈する宗教であり、解釈は常に多様であるのだから、様々なイエス解釈=キリスト教理解が存在するのは当然である。同じことはパウロ理解についても言える。「パウロ的キリスト教」はパウロの言葉の解釈を基盤としているが、その解釈は——パウロの生前から!——相互に違っていた(Iコリント15:12以下参照)。

そのような状況の中で擬似パウロ書簡は、著者のパウロ解釈をパウロ自身に語らせるフィクションとして登場した。つまり、パウロ自身が書いているのだから、これが正しいパウロ理解だというのである。自分の考えに合いそうな聖書の箇所を引き合い

に出して、「聖書に書いてある」と自己正当化することは、今日でも頻繁に見られるが(そうやって、自らの差別的言辭を「キリスト教的立場」だと言い張る現象は枚挙に暇がない)、擬似パウロ書簡はその走りとも言える。教会書簡はその点で典型的な擬似パウロ書簡なのである。

キリスト教が、聖書の権威に依拠する宗教である以上、聖書に「書いてある」ことが正しいことだとする発想は説得的に見える。だがそれは、自分に都合の良い文言だけを引き合いに出して、「書いてある」とする自己正当化の危険と隣り合わせである。我々は、その危険に対して自覚的でなければならぬし(それが本当に「書いてある」のか、それとも自分の読み込みなのかをまずは吟味する必要がある)、また、たとえ本当に「書いてある」としても、聖書の時代とは異なる21世紀を生きる信仰者として従うべき事柄なのかを厳しく問わねばならない。

したがって、我々にいま必要なのは、教会書簡が書いているパウロ解釈の検証ということになる。すなわち、それは本当にパウロ解釈として妥当なものと言えるのか、そして我々が継承すべき理解なのかを、個々の本文に即して検討することである。それは、パウロ理解をめぐる著者との批判的対話と言えるが、そこでは我々自身のパウロ理解、そしてキリスト教理解が問われることにもなる。

その批判的対話においてヒントを与えてくれるのは、教会書簡が排除しようとした「別の道」に注目することだと思う。それは、著者が「異なる教え」として排除しようとした道、当時の「常識」とは違う新しい生き方を促す道、組織の安定・発展とは相容れない独自の振舞いを認める道だが、そこにはパウロ理解の多様性が暗示されているのであり、その「聖書に書かれていない」道もまた、現代のキリスト教には開かれているはずである。この注解では、歴史的・批判的分析によって、その道をも浮かび上がらせようと試みてきたが、それが成功しているかどうかは読者諸賢の批判に委ねたい。

2016年3月号から始まった教会書簡注解は、今号でちょうど70回となった。細かい点にこだわるせいでなかなか進まなかった釈義的議論に最後まで付き合ってください読者の方々(完)